

## 補文の主要部ノとコトの定性選択

著者名(日)	鎌田 倫子
雑誌名	Scientific approaches to language
巻	3
ページ	113-128
発行年	2004-03-30
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1092/00000100/">http://id.nii.ac.jp/1092/00000100/</a>

# 補文の主要部ノとコトの定性選択

鎌田倫子

富山医科薬科大学

補文の主要部ノとコトの選択に、補部の〈特定性〉と補文の主要部の〈定性〉が一致するように〈定性選択〉が関係していることを以下の順で論じる。1) 動詞文の補語となる名詞は主動詞の〈叙実性〉ばかりでなく〈現実モダリティ〉によって指示性の解釈を変える。2) 主動詞の〈叙実性〉と〈現実モダリティ〉により決まる〈事実性〉によって補文の主要部のノとコトの適格性が変わる。3) 〈事実性〉と補部の名詞の〈定性〉により決まる〈特定性〉によって、補文の主要部ノとコトの適格性が変わる。4) 主動詞の種類や場面により、補部に定か不定の補文を必要とする場合、補部の〈定性〉により主要部が決定される。以上から、補文の主要部ノとコトは補部の〈特定性〉により以下の〈定性選択〉を受けると結論する。

〈補文の主要部ノとコトの定性選択説〉（略称〈定性選択説〉）

- 1) 統語機能として、ノは「定名詞節」、コトは「不定名詞節」を形成する。
- 2) 補文の主要部は、補部の〈特定性〉によって選択され、〈特定性〉が高い場合にノを、低い場合にコトをとる。

## 1. はじめに

動詞の補文の主要部ノとコトの選択について、久野 1973 は、現実事態か抽象概念かという命題の意味内容で説明し、井上 1976 は主文の動詞の〈叙実性〉で、Josephs 1976 は〈直接性〉〈間接性〉で説明した。工藤 1985 は動詞の種類とコトとノの選択を、感覚動詞等でノ、思考動詞、伝達動詞等でコト、認知動詞等でノとコトの両方をとると記述した。坪本 1984 は主文と補文に〈同時性〉のある場合にノが使われるとし、橋本 1990 は〈密接性〉と内容が〈対象となることがら〉か〈生産されることがら〉かという意味役割の違いで説明した。

しかし、補文の主要部の選択を命題の意味内容の相違で説明しようとすることは、学習動詞等のように、命題が概念でしかなく、〈直接性〉、〈同時性〉、〈密接性〉による説明が困難な動詞類にもノとコトの選択が見られることから難しい。また、様々な動詞類に統一的に適用できる説明を求める立場からも、先行研究ではまだ十分な説明的妥当性に達しているとは言えないと考える。筆者は、鎌田 1998 で、補文の主要部ノ・コトの選択には構造制限によるものと、他動性によるものがあるとの提案をした。その後、鎌田 2001 の名詞述語文の分析から、ノとコトは名詞節の定性を表し分けたいと考えるようになり、以前の他動性によるという部分を、ノ・コト節の定性の相違で説明できることを提案する。

## 2. 補文の主要部の選択に関わる要因

まず、名詞節の定性ということについて簡単に説明し、次いで、主要部の選択にかかわる、叙実性、現実モダリティについて検討する。

### 2.1. 日本語の名詞の定性について

日本語の名詞には義務的な冠詞がないことから、通常、名詞の定性については議論されることがない。日本語では指示物があるかないかという意味的な指示性しか考慮されることがなかった。この点について、筆者は鎌田 2001 で、日本語の名詞述語文の分析から、日本語では無標の不定名詞<sup>1</sup>の場合、不定標示が空(φ)であるというだけで、有標の標示は定(その、この、等)と不定(ある、何かの等)の限定詞で表されることを示した。即ち日本語では、多用される無標の不定名詞が空標示の裸名詞<sup>2</sup>であるため定性の標示がないかのように見えるが、日本語でも名詞の定性は標示されている

---

<sup>1</sup> 前提として確認しておきたいのは、定・不定は統語的な標示であり、指示性は意味であることである。有標の定名詞は、意味的には指示的名詞であるが、不定名詞には、指示的名詞の解釈と非指示的名詞の解釈がある。したがって、日本語の限定詞のない不定名詞は、指示性に関して曖昧である。

<sup>2</sup> 鎌田 2001 で使用した訳語

のであり、定性について検討する意味があると考え。さらに、(1)のように名詞節による名詞述語文の検討から、ノは定名詞節であり、コトは不定名詞節であると結論した<sup>3</sup>。

- (1) a. [[男と女が一緒に暮らす]ノ/コト]が結婚だ。  
b. [[太郎と花子が一緒に暮らしている]ノ/\*コト]がその結婚だ。  
c. [[太郎と花子が一緒に暮らす]ノ/コト]がいわゆる結婚だ。

即ち、日本語では、名詞ばかりでなく名詞節にも、ノとコトによる定性の標示があると考え。

本稿では動詞の補文の主要部となっているノ、コトが、その定性によって選択されていることを論じる。

## 2.2 <叙実性>による補文の主要部の選択

補文の主要部の選択に関係する要因を1つ1つ明確にしていこう。先行研究では、補文の主要部の選択は主動詞の<叙実性>によるとするものが多い。

- (2) a. 太郎は[次郎が学生だ]ト知ったが、それは誤解だった。  
b. \*太郎は[次郎が学生である]コトを知ったが、それは誤解だった。  
c. \*太郎は[次郎が学生である]ノを知ったが、それは誤解だった。
- (3) a. 太郎は[次郎が学生だ]ト知らなかった。  
b. 太郎は[次郎が学生である]コトを知らなかった。  
c. 太郎は[次郎が学生である]ノを知らなかった。

(2)のように後で、知った内容を否定する「誤解だった」が来ても問題がないのはトであり、ノとコトは補文の命題の真を後で否定できない。また、ノとコトは(3)のように、知らなかったと主文を否定にしても補文の命題の真に変わりはない。即ち、井上 1976 の観察の通り、ノもコトも命題の真が前提されており、叙実動詞に選択

<sup>3</sup> 詳しくは参考文献、鎌田 2001 を参照していただきたい。

されるが、トのみ、叙実性がない動詞とも共起できることを示している。

また、久野 1973 で指摘されたように、ノは、現実にはありえない非現実的な命題の場合、(4)b のように、コト(4)a と比べて適格性が低くなる。

(4) a. 太郎は [次郎が 火星人である] コトを 知った。

b. ?太郎は [次郎が 火星人である] ノを 知った。

しかし、この観察は、(5)a のように非現実的な命題を否定して現実事態と一致する場合にも、また、(5)b のように現実的な命題である場合にも、命題が(5)のように否定文であると常にノの適格性が低いことによって、疑問を生じる。

(5) a. 太郎は [次郎が 火星人ではない] {コト/?ノ} を 知った。

b. 太郎は [次郎が 学生ではない] {コト/?ノ} を 知った。

(6) a. 太郎は [次郎が 火星人である] トイウ {コト/ノ} を 知った。

さらに、(6)のように寺村 1975 で命題が概念である場合に挿入できるとされたトイウが、ノの場合にもコトの場合にも入ることから、この命題はノをとっていても概念であると考えられ、故に、命題の意味内容によってコトとノが使い分けられるという説は成り立たない<sup>4</sup>ことになる。

以上の観察の結果を、以下にまとめる。

ノは、1) 非現実的な命題とは共起しにくいこと、2) 現実的な命題でも否定命題とは共起しにくいこと、3) 命題が概念でも共起し、概念を明示するトイウが入る方が適格性が高い、等の事実が観察された。

コトは、1) 非現実的な命題でも共起し、それを真と前提すること、2) 事態でも概念でも共起すること、3) 否定命題とも共起す

---

<sup>4</sup> ノは概念命題もとることができるのであり、非現実的な命題の場合にはトイウが入って概念であることが明示される方がノの適格性が上がることになる。

ること、等の事実が観察された。

否定文や疑問文と共起することは不定名詞の特徴であり、コトが不定名詞節であるという本稿の主張を支持している。

### 2.3. <現実モダリティ>と名詞の指示性解釈

主動詞の<叙実性>による選択はトとコト・ノを分けることができるが、ノとコトの間を区別することはできないことが井上でも認められている。では、叙実性の他にどのような要因が関係するのでしょうか。Givón1984の言うところの<現実モダリティ>という概念がそれを補うのではないだろうか。Givónは、実際の言語使用では、<叙実性>という概念より、否定や疑問などの文型や時制によって変わる<現実モダリティ>という概念を考慮することが必要だと述べている。これを日本語にあてはめると、主動詞が叙実動詞で、已然態（タ・テイル）の肯定文は<現実モダリティ><sup>5</sup>の文だが、非叙実動詞や、叙実動詞でも否定文、疑問文、あるいは未然態の文では<非現実モダリティ>となることになる。<現実モダリティ>とは文型や動詞の形態などによっても変わる、文によって表されている事態の現実性のことである。

本稿では、日本語の言語事実に即して、<現実性モダリティ>と名詞の指示性解釈の関係を検討する。

まず、叙実動詞と非叙実動詞で、文型や動詞の形態を変えて文の<現実モダリティ>を変えると、文中の定・不定名詞の指示性解釈が、どのように変化するかを観察する。

叙実動詞「見る」の<現実モダリティ>(FACT:F)の構文では、(7)のように有標の不定の限定詞をもつ名詞「あるN」も空標示の不定名詞（裸名詞）も、疑問詞系の不定名詞「何か」以外のすべてが、特定の指示物をもつ指示的 (referential/r) 解釈となる。

---

<sup>5</sup> Givón1984のFACT-Modality、NON-FACT-Modalityを参考に、現実モダリティ・非現実モダリティと名付けた。

- |                            |   |
|----------------------------|---|
| (7) a. 太郎は (r その) 事件を 見た。  | F |
| b. 太郎は (r ある) 事件を 見た。      | F |
| c. 太郎は (r $\phi$ ) 事件を 見た。 | F |
| d. 太郎は (r/n 何か) 事件を 見た。    | F |

即ち、不定名詞の中にも指示的解釈のとりやすさには段階性があること、叙実動詞の〈現実モダリティ〉の文では、不定名詞も指示的解釈をとりやすく、空標示の裸名詞は指示的解釈のみとなることがわかる。

否定文(8)、疑問文(9)、蓋然性のモダリティ文 (10)等の〈非現実モダリティ〉(NON-FACT : NF)の構文では、以下のように、有標の定名詞の「そのN」は指示的解釈(r)のみが成り立つが、不定名詞は、疑問詞による不定名詞「何か／も」以外にも非指示的解釈(non-referential : n)をとるようになる。空標示の裸名詞は、叙実動詞の〈非現実モダリティ〉の構文では常に指示的解釈と非指示的解釈の二通りが成り立つ。

- |                                 |    |
|---------------------------------|----|
| (8) a. 太郎は (r その) 事件を 見なかった。    | NF |
| b. 太郎は (r ある) 事件を 見なかった。        | NF |
| c. 太郎は (r/n $\phi$ ) 事件を 見なかった。 | NF |
| d. 太郎は (n 何も) 事件を 見なかった。        | NF |
| (9) a. 太郎は (r その) 事件を 見たか。      | NF |
| b. 太郎は (r/n ある) 事件を 見たか。        | NF |
| c. 太郎は (r/n $\phi$ ) 事件を 見たか。   | NF |
| d. 太郎は (n 何か) 事件を 見たか。          | NF |
| (10) a. 太郎は (r その) 事件を 見るだろう。   | NF |
| b. 太郎は (r ある) 事件を 見るだろう。        | NF |
| c. 太郎は (r/n $\phi$ ) 事件を 見るだろう。 | NF |
| d. 太郎は (n 何か) 事件を 見るだろう。        | NF |

叙実動詞であっても〈非現実モダリティ〉の構文では、常に文中

の名詞に指示的解釈が現れるわけではなく、空標示の無標の不定名詞は、指示的解釈と非指示的解釈をもち、指示的に曖昧となることがわかる。

非叙実動詞「予想する」では(11)のように<現実モダリティ>の段階でも、有標の定名詞「その事件」以外の不定名詞に全て非指示的解釈(n)が現れ、指示的に曖昧となる。

- (11) a. 太郎は (r その) 事件を 予想した。 F  
 b. 太郎は (r/n ある) 事件を 予想した。 F  
 c. 太郎は (r/n φ) 事件を 予想した。 F  
 d. 太郎は (n 何か) 事件を 予想した。 F
- (12) a. 太郎は (r その) 事件を{予想しなかった/予想したか}。 NF  
 b. 太郎は (r/n ある) 事件を{予想しなかった/予想したか}。 NF  
 c. 太郎は (r/n φ) 事件を{予想しなかった/予想したか}。 NF  
 d. 太郎は (n 何も) 事件を 予想しなかった。 NF
- (13) a. 太郎は (r その) 事件を予想するだろう。 NF  
 b. 太郎は (r/n ある) 事件を 予想するだろう。 NF  
 c. 太郎は (n φ) 事件を 予想するだろう。 NF  
 d. 太郎は (n 何か) 事件を 予想するだろう。 NF

「予想する」では<現実モダリティ>でも、不定名詞に非指示的解釈が可能で、(11)-(13)のように、全ての文型で指示的解釈 (r) と非指示的解釈 (n) が現れる。さらに、蓋然性モダリティの文(13)c では無標の不定名詞である裸名詞も、非指示的解釈のみとなる。非叙実動詞「予想する」では<現実モダリティ>の文型による各段階で、叙実動詞「見る」の場合より1段階早く、不定名詞に非指示的解釈が現れる。

<現実モダリティ>は指示的名詞をとるという Givón1984 の指摘は叙実動詞の振る舞いについてのみあてはまる。非叙実動詞は<非現実モダリティ>であるという記述も、上の観察から基本的に正しいことが確認される。以上が、単独の名詞の指示性解釈についての



観察である。即ち、主動詞の〈叙実性〉と、文型や動詞の形態から決まる〈現実モダリティ〉の組み合わせにより文中の不定名詞の指示性解釈が異なることがわかった。

### 3. 〈特定性〉とノとコトの選択

前節の定・不定名詞の指示性解釈に関する観察と、ノ・コト節が定・不定名詞であることを前提すると、ノ・コト節が、主動詞の〈叙実性〉と〈現実モダリティ〉の組み合わせにより、選択される可能性が考えられる。本節でこの点を検討する。

#### 3.1. 〈事実性〉と補部の名詞の〈定性〉

動詞の〈叙実性〉と〈現実モダリティ〉の組み合わせで表される文の現実性を仮に〈事実性〉と呼ぶことにする。

知覚動詞類で、主文と補文の〈事実性〉を変えてノとコトのとり方を観察する。用例では{ノ/コト}は左の方が適格性が高く、{ノ・コト}は差がないことを表している。

まず、主文の動詞の形態と文型を変え、〈事実性〉が変わると、補文の主要部としてのノとコトの適格性がいかに変わるかをみる。

- (14) a. 太郎は [花子が 本を 書く] {ノ・コト} を 知った。  
b. 太郎は [花子が 本を 書く] {ノ・コト} を 知っている。  
c. 太郎は [花子が 本を 書く] {コト/ノ} を 知らない。  
d. 太郎は [花子が 本を 書く] {コト/ノ} を 知るだろう。  
e. 太郎は [花子が 本を 書く] {コト/ノ} を 知っているか。

(14)c-e のように、否定や蓋然性のモダリティ文、疑問文等の〈非現実モダリティ〉で〈事実性〉が低い場合、明らかにコトの適格性が高いことがわかる。即ち、主文の〈事実性〉が低いとコトをとる。

また、(15)のように補部の動詞の形態による、補文の〈事実性〉もノとコトの適格性に関係することがわかる。

- (15) a. 太郎は [花子が 本を 書いた] {ノ/コト} を 知った。  
b. 太郎は [花子が 本を 書いている] {ノ/コト} を 知った。

- c. 太郎は [花子が 本を 書く] {コト/ノ} を 知った。
- d. 太郎は [花子が 本を 書かない] {コト/ノ} を 知った。

補部の文末が(15)cd のように否定や未然態の〈非現実モダリティ〉ではコトが、(15)ab のように已然態の〈現実モダリティ〉ではノの適格性が高い。

さらに、(16)のように補部の名詞の〈定性〉もノとコトの適格性に関係することが観察される。

- (16) a. 太郎は [その学生が この題字を 書く] {ノ/コト} を 知った。
- b. 太郎は [学生が 題字を 書く] {コト・ノ} を 知った。
- c. 太郎は [どの学生も 作文を 書く] {コト・ノ} を 知った。
- d. 太郎は [どの学生も 作文が 書ける] {コト/ノ} を 知った。
- e. 太郎は [どの学生も 毎日日記を 書く] {コト/ノ} を 知った。

補部の名詞が定名詞の(16)a ではノの方が適格性が高いが、不定名詞 (16)bc では差がなくなり、有標の不定名詞(16)c では微妙にコトの適格性が上がる。また、(16)de のような、命題が一般的言明である可能文や、補部の事態が複数回生起を意味する文では、コトの方がやや適格性が高い。一般的言明や複数回生起する事態は、補部の事態が不特定となるので、コトが不定名詞節であるとすれば、コトをとりやすいことは納得できる。

### 3.2. 〈特定性〉による〈定性仮説〉の提出

補文の主要部ノとコトの選択に関わる要素として、主文と補部の〈事実性〉即ち〈叙実性〉と〈現実モダリティ〉、補部の名詞の〈定性〉、補文の事態の〈一回性〉などが関係することがわかった。即ち、〈事実性〉と定名詞により、補文の命題が、唯一特定の事態と規定されることによりノの適格性が高まり、唯一特定の事態でないことが明確になるとコトの適格性が高まる。この特徴を、補部の〈特定性〉と呼ぶと、〈特定性〉は、主文と補部の〈事実性〉と補部の名詞の〈定性〉、補文の命題の〈一回性〉等によって決まることになる。これを、以下のようにまとめる。

(17) <補文の主要部ノとコトの定性選択説> (略称<定性選択説>)

- 1) 統語機能として、ノは「定名詞節」、コトは「不定名詞節」を形成する。
- 2) 補文の主要部は、補部の<特定性>によって選択され、<特定性>が高い場合にノを、低い場合にコトをとる。

#### 4. <定性選択説>の検証

##### 4.1. 感情動詞における<定性選択説>の検証

感情動詞の補文の主要部の選択を、補部の<特定性>により<定性選択説>で説明できるか検証してみよう。

- (18) a. 太郎は [花子が 郷里へ 帰る] {コト・ノ} を 喜んだ。  
b. 太郎は [花子が 郷里へ {帰った/帰っている}] {ノ/コト} を 喜んだ。  
c. 太郎は [自分が 昨年 郷里へ 帰った] {ノ/コト} を 喜んだ。
- (19) a. 太郎は [学生が 時々 郷里へ 帰る] {コト/ノ} を 喜んだ。  
b. 太郎は [学生が あまり 郷里へ 帰らない] {コト/ノ} を 喜んだ。  
c. 太郎は [誰かが 将来 郷里へ 帰る] {コト/ノ} を 喜んだ。

感情動詞の (18)(19)の例でも、まず<事実性>から (18)bc のように補部の文末が已然態の方が、未然態の(18)a よりノが選択されやすい。名詞の<定性>からは、主語が定名詞である已然態の補部 (18)bc ではノの、主語が不定名詞である、否定、未然態、複数回生起の補部(19)abc ではコトの、適格性が高い。補文の主要部の選択に、<事実性>と同様、名詞の<定性>も関係し、補部の命題の<特定性>が主要部を決定していることがわかる。命題が「現実事態」か「概念」という意味の差は判断しにくいだが、補部の<特定性>は、定名詞にしたり、時制を変えたりすることで、言語的な手がかりから、微妙な差も段階的に把握することができる。

感情動詞文は命題の真を含意する叙実動詞なので、主語を不定名詞に、文型を非現実モダリティに変えても、全体としての補部の<

事実性>は揺るがない。したがって、(19)のように主要部としてコトの適格性が上がっても、ノが不適格になるというわけではない。補部の<特定性>を低くしてノを不適格にするには、以下(20)のように、多くの要素の相乗効果が必要である。

- (20) a. 太郎は [誰もが 将来国へ 帰らない] {コト/??ノ} を 喜ばないだろう。  
b. 太郎は [誰かが いつか国へ 帰れる] {コト/??ノ} を 喜ぶだろう。

#### 4.2. 形容詞文の補部における<定性選択説>の検証

この<定性選択>では、概念か現実事態か命題内容では区別しにくい形容詞文の補部でも、限定詞で定名詞を作ることができるので、補部の名詞の<定性>から、補文の主要部の適格性を判断することができる。

- (21) a. 太郎は [春は 花が 美しい] {コト/ノ} を 知った。  
b. 太郎は [今この庭で その桜が 美しい] {ノ/コト} を 知った。

補部の述語が形容詞の未然態であっても、(21)bのように時や場所が指定され、主語が定名詞になると、補部の命題の<特定性>が上がり、ノの適格性があがる。形容詞文の補部でも、名詞が定名詞で、文意から「一回性」があり、<特定性>が高いと、主要部としてノの適格性が上がるのである。

形態的に同じ補文をとる場合には、主要部ノとコトにより補部の<特定性>が異なる結果、文の意味解釈が異なってくる。以下の(22)で補文の主語となる無標の不定名詞が異なる指示性(r/n)解釈を受けることから、補文の意味解釈が変わってくることを観察する。

- (22) a. 太郎は [少女 r が 美しい] ノを 知らない。  
b. 太郎は [少女 r/n が 美しい] コトを 知らない。

(22)aのようにノをとると、全体が定名詞節であることから、<特

定性>が強くなり、補文の主語の無標の不定名詞「少女」が指示的名詞と解釈され、特定の少女を思い描いて「現実事態」の解釈になる。(22)bのように主要部にコトをとると不定名詞節なので、<特定性>が弱く、主語の「少女」に非指示的解釈が可能となり、少女一般についての記述、即ち「概念」と解釈されやすくなる。しかし、不定名詞は基本的に指示性に関して曖昧なので、指示的解釈をとり、現実事態の意味も可能である。

このような過程を経て、ノ節が「現実事態」、コトが「概念」と解釈されるようになったと考え、この現象も<定性選択説>を支持する証拠となる。特に、主文が否定文で非現実モダリティであるにも関わらず、(22)aのようにノ節の補部の無標の不定名詞が、指示的解釈になることは、ノ節が全体として定名詞節であることを強く支持する証拠となる。

#### 4.3. 学習動詞における<定性選択説>の検証

学習動詞の補部は概念であり、(23)のように、非現実モダリティの一般記述文で、<一回性>を欠くため、不定名詞節であるコトの適格性が高い。しかし、補部の時制を(23)bのように既然態「ている」にするとノの許容性が上がる。また、(24)のように、現実的な内容にして、時制を既然態に、補部の名詞を定名詞にしく<特定性>を増すと、さらにノの許容度が上がる。

- (23) a. 花子は [惑星が恒星の周りを公転する] {コト/?ノ} を学んだ。  
b. 花子は [地球が太陽の周りを公転している] {コト/ノ} を学んだ。  
c. 花子は [地球が太陽の周りを公転する] (トイウ){コト・ノ} を学んだ。
- (24) a. 花子は [担当者が 仕事を 補助する] {コト/?ノ} を 学んだ。  
b. 花子は [担当者が 仕事を 補助している] {コト/ノ} を 学んだ。  
c. 花子は [その担当者が 仕事を 補助している] {ノ・コト} を学んだ。

以上のように、感情動詞や学習動詞でも、補文の主要部の選択が<

特定性>によって説明できることをみた。命題内容が概念である学習動詞や、現実事態かどうかわかりにくい形容詞文の補部でも、補部の定名詞による<特定性>からノになることが、<定性選択>により説明できる。

## 5. 生起・存在動詞

補文の事態そのものが主語になる動詞類は自動詞文の中でも非常に少ない<sup>6</sup>が、存在・生起文は「事態」を表わす補文をガ格にとることができる動詞類である。存在・生起動詞の主語位置には以下のようにコト節しか現れない。

この動詞類では、補文の命題は「現実事態」であり、また、補文と主文の動詞の表わす事態とに坪本 1984 のいう<同時性>も見られるので、ノになることが予想される。しかし、実際には、命題が「現実事態」で、主文動詞が既然態のタ形をとっても、(25)のように、ノをとることができない。

- (25) a. [正門前で 警官隊と学生が にらみ合う] (トイウ){コト/\*ノ}が 起こった。  
b. [交差点で3台の車が衝突する] (トイウ){コト/?ノ}が あった。  
c. [火山が いたる場所で活動する] (トイウ){コト/\*ノ}が かつて 存在した。

(25)ではトイウが入ることが観察されるが、意味を考えると実際にそのような事態が生起することを述べる意味なので補文の命題の意味内容は「現実事態」であり、任意にトイウを挿入して「事態命題」に変わると考えられる。では「現実事態」を表す補部なのに、何故、主要部としてコトの適格性が高いのであろうか。

---

<sup>6</sup> 事態の出現や存在を表すこの文は非対格自動詞文なので、表層の主語は基底では動詞の内項である。

- (26) a. [交差点で 2台のバスが 衝突する] {コト/\*ノ}が 起こった。  
 b. [交差点で 太郎の車が バスに 衝突する] {コト/??ノ}が 起こった。  
 c. [この交差点で 太郎の車が バスに衝突する] {コト/??ノ}が 起こった。

補部の名詞や場所を(26)bcのように定名詞に変えて、〈特定性〉を増してもノの容認性はあまり上がらず、この補文がコトをとるという基本的事実是不変である。

この存在・生起文でコトをとるのは、主動詞の意味から不定名詞節を採らなければならない文型であるためと考えられる。存在・生起動詞は事態の生起について最初に述べる文であり、談話的に関連する文脈の最初の一文となるものである。数は少ないが、このような文が、文脈中の初出であるところから、談話的理由により不定名詞節をとらなければならない文であると思われる。

主語位置への普通名詞の生起を調べても、(27)aのように、主語がガ格の場合は特に、定名詞が主語になりにくいことが観察される。

- (27) a. 公園で (ある/1つの/?その/何か/φ) 事件が 起こった。  
 b. 公園で (?ある/?1つの/その/\*何か/φ) 事件は 起こった。

(27)のように普通名詞で確認すると主語が「が」で現われる(27)aのような文では主語は不定名詞、「は」で現われる文(27)bでは定名詞が、より適格性が高いことが観察される。しかし、(28)のように主語位置に文をとる主語節では、主文の主語標示のガをハに変えようとしても変えられない。

- (28) a. [この交差点で 太郎の車が バスに 衝突する] (トイウ)コト {が/\*は} 起こった。  
 b. [この交差点で 太郎の車が バスに 衝突する] (トイウ)コト { が/\*は } あった。

「その事件」のように指示的な定名詞と異なり、補文で事件の内容

を述べること自体が、初出を意味する表現形式であることによると考えられる。生起動詞類の、主語節はガ主語が基本なのであり、そうであるなら、ガで提示される(28)のような主語節がコトしかとれないことは、(27)a との比較から、コト節が不定名詞節を形成していることの有力な証拠となる。

主に談話文脈の最初に使われる文である生起・存在文で、主語節にコト節が使われることは、コト節が単に非指示的名詞節なのではなく、不定名詞と同様、初出位置で使われる不定名詞節であることを強く支持している。

コト節の本質的な統語機能が不定名詞節を形成することであるとしたら、生起文のような初出事態や、習慣の文のような複数回の事態や可能文、学習動詞のような概念を表す一般的な記述にコトが使われることはむしろ必然である。

## 6. 結論

補文の主要部ノとコトの選択は以下の(29)に再掲する、〈補文の主要部ノとコトの定性選択説〉によって示されるように、補部の〈特定性〉によって選ばれると結論する。

(29) 〈補文の主要部ノとコトの定性選択説〉 (略称〈定性選択説〉)

- 1) 統語機能として、ノは「定名詞節」、コトは「不定名詞節」を形成する。
- 2) 補文の主要部は、補部の〈特定性〉によって選択され、〈特定性〉が高い場合にノを、低い場合にコトをとる。

こうした選択の結果、同形態の補部ではノとコトで、補部の〈特定性〉に関する含意が変わり、ノでは〈特定性〉の強さから、現実事態と解釈され、コトでは〈特定性〉の弱さから、一般記述と解釈され、これにより、ノは「現実事態」、コトは「概念」という意味解釈を生むことになったと考える。



## 参考文献

- Givón, Talmy (1984) *Syntax*. John Benjamins Publishing Company.
- 橋本 修 (1990) 「補文標識『の』『こと』の分布に関わる意味規則」『国語学』163、 pp. (1)-(12).
- 井上和子 (1976) 『変形文法と日本語(上下)』大修館書店.
- 鎌田倫子 (1998) 「内容節をとる動詞のコトとノの選択規則- 主動詞の意味分類と節の時制から- 」『日本語教育』98、 pp. 1-12.
- 鎌田倫子 (2001) 「日本語教師の課題- ノとコトの使い分けの現在- 」『日本語学』20-3、 pp. 26-35、 明治書院
- 鎌田倫子 (2002) 「ノとコトの選択- 統語特徴と構造から- 」『言語科学研究特別号 2』神田外語大学大学院紀要.
- Kubo, Miori (1992) *Japanese Syntactic Structures and their Constructional Meanings*. Doctoral dissertation, University of Massachusetts, Amhast, Hituzi Syobo. 1994.
- 工藤真由美 (1985) 「ノ、コトの使い分けと動詞の種類」『国文学解釈と観賞』50-3、 pp. 45-52.
- 近藤泰弘 (1997) 「「の」「こと」による名詞節の性質」『国語学』190、 pp. 1-11、 国語学会.
- 久野暁 (1973) 『日本文法研究』大修館書店.
- 寺村秀夫 (1982・1984・1991) 『日本語のシンタクスと意味』ⅠⅡⅢ. くろしお出版.
- 坪本篤朗 (1984) 「文の中に文を埋めるときコトとノはどこが違うのか」『国文学』29-6、 pp. 87-92、

〒930-0194 富山市杉谷 2360

富山医科薬科大学 日本語・日本事情

[ktomoko@ms.toyama-mpu.ac.jp](mailto:ktomoko@ms.toyama-mpu.ac.jp)